

# 融

觀阿弥作

世阿弥作ともいふ

季は	地は	後	前
秋八月	京都	ワキ	ワキ
		シテ	シテ
		融の大臣	東国の僧
		前に同じ	塩汲む翁

「是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち都に上り候。」

下歌「思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け。舟路を渡り山を越え。千里も同じ一足に。」

上歌「夕べを重ね朝毎の。宿の名残も重なりて。都に早く着きにけり。」

詞「急ぎ候ふ程に。是は早都に着きて候。此あたりをば六条河原の院とやらん申し候。暫く休らひ一見せばやと思ひ候。」

シテ一聲「月も早。出汐になりて塩竈の。うらさび渡る気色かな。」

サシ「陸奥はいづくはあれど塩竈の。恨みて渡る老が身の。よるべもいさや定めなき。心も澄める水の面に。照る月並を数ふれば。今宵ぞ秋の最中なる。」

実にや移せば塩竈の。月も都の最中かな。」

下歌「秋は半身は既に。老い重なりて諸白髪。」

上歌

「雪とのみ。 積りぞ来ぬる年月の。 く。 春を迎へ

秋を添へ。 時雨るゝ松の風までも。 我身の上と汲みて知る。 汐馴衣袖寒き。 浦わの秋の夕べかな。

く。

ワキ詞  
「如何にこれなる尉殿。 御身は此あたりの人か。

シテ詞  
「さん候此所の汐汲にて候。

ワキ  
「不思議やこゝは海辺にてもなきに。 汐汲とは誤りたるか尉殿。

シテ  
「あら何ともなや。 さてこゝをば何処と知ろし召されて候ふぞ。

ワキ  
「此所をば六条河原の院とこそ承りて候へ。

シテ  
「河原の院こそ塩竈の浦候ふよ。 融の大臣陸奥の千賀の塩竈を。 都の内に移されたる海辺なれば。 名に流れたる河原の院の。 河水をも汲め池水をも汲め。 こゝ塩竈の浦人なれば。 汐汲となどおぼさぬぞや。

ワキ

「實に／＼陸奥の千賀の塩竈を。都の内に移された  
る事承りおよびて候。さてはあれなるは籬が島候  
ふか。

シテ  
「さん候あれこそ籬が島候ふよ。融の大臣常は御舟  
を寄せられ。御酒宴の遊舞さまぐなりし所ぞか  
し。や。月こそ出でゝ候へ。

ワキ  
「實に／＼月の出でゝ候ふぞや。あの籬が島の森の梢  
に。鳥の宿し囀りて。しもんに移る月影までも。

孤舟に帰る身の上かと。思ひ出でられて候。

シテ  
「何と唯今の面前の氣色が。御僧の御身に知らるゝ  
とは。若も賈島が言葉やらん。鳥は宿す池中の樹。

ワキ  
「僧は敲く月下の門。

シテ  
「推すも。

ワキ  
「敲くも。

シテ  
「古人の心。

二人  
「今目前の秋暮にあり。

地

「實にやいにしへも。月には千賀の塩竈の。く。

浦わの秋も半にて。松風も立つなりや。霧の籬の島隠れ。いざ我も立ち渡り。昔の跡を陸奥の。千

賀の浦わを詠めんや。千賀の浦わを詠めん。

ワキ詞

「塩竈の浦を都の内に移されたる謂御物語り候へ。

シテ詞

「嵯峨の天皇の御宇に。融の大臣陸奥の千賀の塩竈の眺望を聞し召し及ばせ給ひ。此所に塩竈を移し。

あの難波の御津の浦よりも。日毎に潮を汲ませ。

こゝにて塩を焼かせつゝ。一生御遊の便とし給ふ。

然れども其後は相続して翫ぶ人もなけれど。浦は

其まゝ干汐となつて。地辺に淀む溜水は。雨の残りの古き江に。落葉散り浮く松陰の。月だに澄まで秋風の。音のみ残るばかりなり。されば歌にも。君まさで煙絶えにし塩竈の。うらさびしくも見え渡るかなと。貫之も詠めて候。

地  
「實にや詠むれば。月のみ満てる塩竈の。浦さびし

くも荒れはつる。跡の世までもしほじみて。老の  
波も帰るやらん。あら昔恋しや。恋しや恋しやと。  
慕へども歎けども。かひも渚の浦千鳥。音をのみ  
鳴くばかりなり。く。

ワキ詞  
「如何に尉殿。見え渡りたる山々は皆名所にてぞ候  
ふらん御教へ候へ。

シテ詞  
「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候ふべ  
し。

ワキ  
「先あれに見えたるは音羽山候ふか。

シテ  
「さん候ふあれこそ音羽山候ふよ。

ワキ  
「音羽山音に聞きつゝ逢坂の。閑のこなたにとよみ  
たれば。逢坂山も程近うこそ候ふらめ。

シテ  
「仰せの如く閑のこなたにとはよみたれども。あな  
たにあたれば逢坂の。山は音羽の峰に隠れて。此  
辺よりは見えぬなり。

ワキ  
「さてくく音羽の嶺つゞき。次第々々の山並の。名

所々々を語り給へ。

シテ 「語りも尽さじ言の葉の。歌の中山清閑寺。今熊野  
とはあれぞかし。

ワキ 「さて其末につゞきたる。里一村の森の木立。

シテ 「それをしるべに御覧ぜよ。まだき時雨の秋なれば。

紅葉も青き稻荷山。

ワキ 「風も暮れ行く雲の端の。梢も青き秋の色。

シテ詞 「今こそ秋よ名にしあふ。春は花見し藤の森。

ワキ 「緑の空もかげ青き。野山につゞく里は如何に。

シテ 「あれこそ夕されば。

ワキ 「野辺の秋風。

シテ 「身にしみて。

ワキ 「鶴鳴くなる。

シテ 「深草山よ。

地 「木幡山。伏見野竹田。淀鳥羽も見えたりや。

ロンギ地 「詠めやる。其方の空は白雲の。はや暮れ初むる遠

山の。嶺も木深く見えたるは。如何なる所なるらん。

シテ「あれこそ大原や。小塩の山も今日こそは。御覽じ初めつらめ。猶々問はせ給へや。

地「聞くにつけても秋の風。吹く方なれや峰つゞき。西に見ゆるは何処ぞ。

シテ「秋も早。く。半更け行く松の尾の。嵐山も見えたり。

地「嵐更け行く秋の夜の。空澄み上る月影に。

シテ「さす汐時もはや過ぎて。

地「ひまもおし照る月にめで。

シテ「興に乗じて。

地「身をば實に。忘れたり秋の夜の。長物語よしなや。

まづいざや汐を汲まんとて。持つや田子の浦。東からげの汐衣。汲めば月をも。袖に望汐の。汀に帰る波の夜の。老人と見えつるが。汐曇にかきま

ぎれて。跡も見えずなりにけり。跡をも見せずな

りにけり。 (中入)

ワキ

「磯枕。苔の衣を片敷きて。く。岩根の床に夜もすがら。猶も奇特を見るやとて。夢待ちがほの旅寐かな。く。

後ジテ

「忘れて年を経し物を。又いにしへに帰る波の。満つ塩竈の浦人の。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わも遠き世に。其名を残すまうちきみ。融の大臣と

は我事なり。我塩竈の浦に心を寄せ。あの籬が島の松陰に。明月に舟を浮べ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪を廻らす雲の袖。

地

「さすや桂の枝々に。

シテ

「光りを花と散らす粧ひ。

地

「こゝにも名に立つ白河の波の。

シテ

「あら面白や曲水の盃。

地

「浮けたりく遊舞の袖。」

（早舞）

ロンギ地

「あら面白の遊樂や。そもそも明月の其中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきは。如何なる謂なるらん。」

シテ

「それは西岫に。入日のいまだ近ければ。其影に隠さるゝ。たとへば月の有る夜は。星の薄きが如くなり。」

地

「青陽の春の始めには。」

シテ

「霞む夕べの遠山。」

地

「黛の色に三日月の。」

シテ

「影を舟にも譬へたり。」

地

「又水中の遊魚は。」

シテ

「釣と疑ふ。」

地

「雲上の飛鳥は。」

シテ

「弓の影とも驚く。」

地

「一輪も降らず。」

シテ  
「万水も昇らず。

地  
「鳥は池辺の樹に宿し。

シテ  
「魚は月下の波に伏す。

地  
「聞くとも飽かじ秋の夜の。

シテ  
「鳥も鳴き。

地  
「鐘も聞えて。

シテ  
「月も早。

地  
「影傾きて明方の。雲となり雨となる。此光陰に誘

はれて。月の都に入り給ふ粧ひ。あら名残惜しの  
面影や。名残惜しの面影。